『コルナイ・ヤーノシュ自伝』

出版社：日本評論社
発行：2006年6月
ISBN：4535554730
価格：￥4935 （本体￥4700＋税）

この本を買う

　かつてソ連・東欧圏で「一番ましな国」と言われたハンガリー。その中にあって、計画経済には未来がないことを一貫して示し続けた世界的な経済学者の自伝だ。

　コルナイの生涯は、東欧の社会主義史そのものと言ってもよい。ユダヤ人家庭に生まれ、父親をナチの収容所で失い、戦後ハンガリーが共産化されると、一度は共産党員となった。だが、５６年のハンガリー事件を機に共産主義と決別し、体制の限界を経済学の上から理論的に裏付ける研究に乗り出す。「不足」などの著作は、西側では体制への内部告発とも受け取られた。

　「民主主義は資本主義制度なしでは存在し得ない」といったコルナイの警句は、恐らくは中国やベトナムなど残存する共産党独裁の国々にも当てはまる。旧秘密警察のファイルによって自分や仲間の過去を洗い出すなど、およそ学者らしからぬ生々しい記述も目につく。良質の同時代史だ。盛田常夫訳。（日本評論社、４７００円）

評者・布施　裕之（本社編集委員）

(2006年9月25日　読売新聞)